

資料紹介

か ね 鉄漿(齒黒)付け道具一式

枚方宿鍵屋資料館には、枚方市教育委員会所蔵の鉄漿付け道具(民具番号 0-2712)が常設展示されています。旧枚方宿の旧家に残されていたもので、耳盥などは、五七桐文が散らされた梨地蒔絵で、見込み(内面)には流水文蒔絵が施された大変上等な品です。このような蒔絵のほどこされた鉄漿付けの道具一式は、経済的にゆとりのある家庭の嫁入り道具とされたもので、鏡、櫛箱、鏡台など女性の化粧道具は色々ありますが、なかでも鉄漿付けの道具は、通過儀礼と関連した特別な意味を持つ道具として大切にされました。

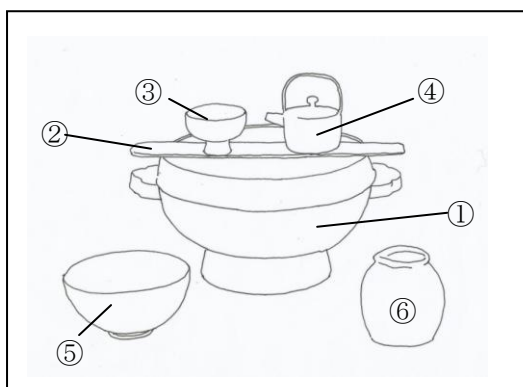
前近代の社会では、女性が一定の立場や年齢になると、歯を黒く染める鉄漿(齒黒)付けの習慣がありました。既婚者の証として染めるというのが一般的ですが、少女が初潮を迎えたり、第二次性徴の現れる13歳頃になると「鉄漿付祝い」などと称して、歯を染める慣習もみられました。鉄漿は、室町時代までは上流階層の男女に共通する化粧でしたが、江戸時代には女性の風俗として定着し、庶民の間にも広がっていきました。

では、この鉄漿付けは、どのように行うのでしょうか。「鉄漿」は、「おはぐろ」と当て字で読ませますが、本来は、歯を染めるための溶液のことを示します。歯を艶のある美しい黒色に染めるために必要なのが、小間物屋や薬種店で市販されていた「五倍子粉」です。これは、ウルシ科の落葉小喬木のヌルデの葉にできる虫こぶを加工し粉末状にしたもので、インクの原料にも使用されるタンニン酸を多く含みます。もっとも、五倍子そのものは黄色い粉で、これだけで黒く染まるわけではありません。別に酢酸に鉄を溶かした溶液(この酢酸第一鉄溶液を、「鉄漿」「鉄漿水」と呼ぶ)を作り、これに五倍子を合わせ、非水溶性の化合物(タンニン酸第二鉄)にすることで、黒く発色させます。その調合には、家ごとの工夫がありましたが、一般的には、「お歯黒壺」などと呼ばれる小壺に、水と、酢・米のとぎ汁・麴・飴・酒・松笠などの糖質を加え、ここに古釘や鉄屑を浸し、囲炉裏や火鉢の灰・竈の脇などに埋めて酢酸発酵させます。出来上がった鉄漿水は茶褐色で、強い臭気を放ちます。

実際に歯に塗りつける時には、「鉄漿筆」などの房楊枝に、「鉄漿沸かし」で熱した鉄漿水を含ま

せ、鉄漿水と五倍子粉を交互に歯に塗ります。十分に染まるまで繰り返し塗るのですが、臭気もさながら、大変渋いので、頻繁に唾液を吐き、うがいをしなければなりません。そのため、手元に盥^{たらい}とうがい用の茶碗を用意しておく必要がありました。鉄漿の定着をよくするため、初めて歯を染める際には、ザクロの皮などの強い酸気で歯の表面を荒れさせる、鉄漿下^{かねした}などの処置したようですが、歯の質によって色落ちに差があり、毎日塗らなければならない人もいたようです。匂いと味は厄介ですが、タンニン酸で歯をコーティングする鉄漿が、虫歯の予防に大いに役立っていたことも指摘されています。

現代人から見ると、おしろいを塗った白い顔に、漆黒の歯を見せて笑う女性の顔は、なんだか恐ろしいような気がします。明治時代、開国した日本を訪れた西洋の人々も、同様の印象を抱いたに違いありません。明治維新後の文明開化政策のなかで、鉄漿は野蛮な習俗として否定されます。しかし、子どもから娘になった証、妻になった証として塗っていた鉄漿は、女性にとって、身だしなみやお洒落^{しゃれ}以上の意味を持っていました。そのためでしょうか。都市部では明治時代に廃れた鉄漿の習俗も、地方や離島では大正時代、昭和初期まで残っていました。





上 ⑦

左 ⑧



鉄漿付けの様子

「百人女郎品定 下之巻」

享保8年(1723)

(『庶民生活史料集成』三十巻

三一書房から転載)

① 梨地五七桐紋耳盃 (なしじごしちのきりもん みみだらい)

27.5 (口径) × 37 (最大幅) × 17 (高)

見込み(内面)は黒漆塗梨地沢渦流水文。耳状の取手が付くので、このように呼ばれる。

② 真鍮七宝繫鶴亀松竹文渡し金 (しんちゅうしっぽうつなぎつるかめしょうちくもん わたしがね)

36.5 (長) × 6.3 (幅)

耳盃の上に掛け、鉄漿杯と鉄漿沸かしを置く。

③ 真鍮鶴亀松竹文鉄漿杯 (しんちゅうつるかめしょうちくもん かねつき)

8 (口径) × 5.3 (高)

鉄漿水を入れる小さな碗。

④ 真鍮鶴亀松竹文鉄漿沸し (しんちゅうつるかめしょうちくもん かねわかし)

10 (最大幅) × 10 (最大高)

鉄漿水を火鉢などにかけて温め、鉄漿杯に注ぐ。

⑤ 色絵牡丹文うがい茶碗 (いろえぼたんもん うがいちゃわん)

14.5 (口径) × 7.5 (高)

鉄漿を塗った後に、うがいをするための碗。鉄漿水には強い臭気と渋味があるため、専用の碗を使った。

⑥ 丹波焼お歯黒壺 (たんばやき おはぐろつぼ)

6 (口径) × 10 (最大幅) × 10 (高)

旧枚方宿の発掘調査(三矢町浄念寺庫裏改修発掘修調査)で出土した丹波焼のお歯黒壺。土器片を復元したもの。宝暦14年(1764)の火災跡から出土。鉄漿水を調合した壺。

⑦ 黒漆塗五倍子箱 (くろうるしぬり ふしばこ)

五倍子を入れる小箱。

⑧ 五倍子粉袋 (ふしのこ ふくろ)

袋の表には、「河州生駒山麓 辻子谷 御ふしの粉司」とある。生駒辻子谷は漢方薬の水車製粉業が盛んな地で、漢方薬でもある五倍子粉の生産もおこなわれていた。

※①～⑤⑦⑧は枚方市堤町の個人旧蔵。(鍵屋資料館展示資料は①～⑥、⑦⑧は枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館)

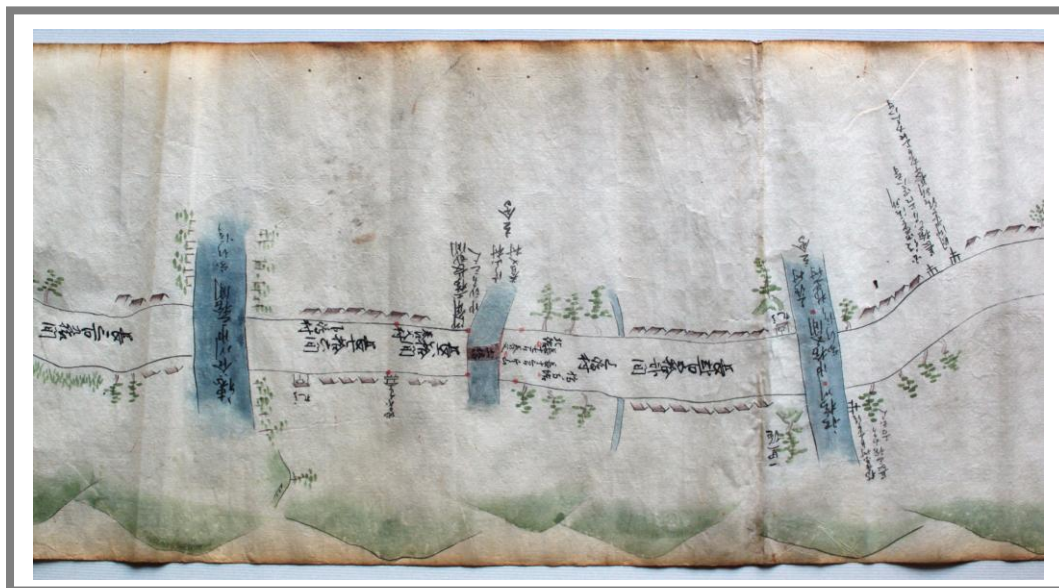
⑥は三矢町浄念寺第26次調査発掘遺物。いずれも、旧枚方宿の遺品。

展示によせて

摂津市民図書館が所蔵する「京街道絵図」は、淡彩色の街道絵図です。現在は3本の巻紙

の状態^{おいわけ}で保管されており、① 東海道の大津宿付近の大津追分から山科を経由し、伏見宿に至るルートと、② 同じく大津追分から分岐し、日ノ岡峠を経由し、京の粟田口に至るルート、さらに、③ 伏見宿から大坂に至るルートが、それぞれ独立した絵図として、描かれています。大津から伏見経由、もしくは京経由で大坂に至る、これらの街道は「東海道」の延長部でもあり、おもに「京街道」「大坂街道」と呼ばれるほか、部分的には「伏見街道」「三条街道」などとも呼ばれます。京街道には、伏見・淀・枚方・守口の四つの宿場が置かれ、淀川舟運と並行して走る幹線として、往時はにぎわいをみせました。

本図は、摂津国島下郡鳥飼西之村(現摂津市)の旧村役人家の旧蔵文書で、人馬の継立^{つぎたて}に関わる宿駅施設(本陣・問屋場・立場)についてはほとんど描かれておらず、橋や用水樋、道路についての長さや幅などの規格、村や領主の支配区分が詳細に書き込まれています。橋のところには、「国役普請」「御入用普請」「百姓自普請」などと記されていることもあり、普請、つまり、土木工事の種別について把握するための絵図であったと思われます。江戸時代、頻繁に流されてしまう橋の修繕や街道の改修は、大半が周辺村落に課された夫役によって成り立っており、村役人は、このような普請についての情報を把握しておく必要がありました。記された代官名から宝暦4年(1754)～寛政元年(1789)頃に作成されたものと推測され、具体的な契機は不明ですが、近隣村の目線から作成された街道絵図といえるでしょう。



京街道絵図

(摂津市民図書館蔵)

上島村・宇山村・養父村・
下島村(現枚方市内)あたり
部分

巻紙3巻 紙本淡彩色

宝暦4年(1754)～寛政元
年(1789)頃作成か

展示案内

「京街道パネル展」のご案内

鍵屋資料館では、1月16日(日)から2月25日(金)まで「京街道パネル展」を開催しています。上に紹介した「京街道絵図」ほか、枚方市中央図書館市史資料室蔵の「京街道図巻」をパネル展示し、街道の諸設備について解説しています。現在の地形図や写真も掲示しますので、現在の地形図上でルートを確認しながら、江戸時代の幹線・京街道の道程をたどってみてください。